

日本ではタブー視されがちな「お金儲け」の意義と本質を、真正面から語る

高岡壮一郎 オススメの

巨人・渋沢栄一の「富を築く100の教え」

● 渋澤健・著 / 講談社

「優れた人格とお金儲けは両立する」——本書で紹介されている渋沢栄一氏の「論語と算盤」からの一節です。21世紀の拝金主義が及びこる現代の日本で、改めてこの言葉を考えてみる必要があるのでしょうか。

渋沢栄一氏は日本が近代経済社会へと歩み始めた明治時代に活躍した

実業家であり、「資本主義の父」と呼ばれました。明治の初期に日本の新しい時代を切り開いた彼がこの言葉で伝えたかったことを、彼の曾孫である著者は本書でこう言います。

「慈愛の心を持って、社会のために行動する人物は、きつとお金儲けではない天使のような人だ、こんな風に考えている人も多いでしょう。(中略) 実際、自らの信義に基づいて、お金儲けと社会貢献を両立している人は、世界の実業界には、数え切れないほどいるのです」

著者が改めて、実業と社会貢献は一致するということを主張しなければならぬほどに、日本人はナイーブな天使なのかもしれません。

ところでよく考えてみれば、天使は、財やサービスを生産し他人を豊かにすることはできません。財やサービスを提供するには、その業務に従事する人を養うだけの資金と利益が必要だからです。天使は、利潤を追求せず、所得を高めようとしませんから、天使が払う税金は相対的に

に少なく、誰か別の人が稼いだお金を頼りにするばかりです。

逆に、現代社会においてお金儲けで成功した人、2005年に流石語大賞にもなった「富裕層」とは、どういう人たちなのでしょう。簡単に言えば、多くのお客様を長期的に獲得した人です。長期的にお客様を獲得する人とはどういう人でしょうか？ 多くの人々の欲求を十分に満足させた人です。これは優れた人格、慈愛の心なしには成し遂げることはできない所業ではないのでしょうか。

実際、富裕層を見ると、最多層は40代、人格的に優れ、現役で活躍する経営者・専門職・投資家の方々です。お会いすると「気持ちの良い人」ばかり。そんな

外に知られておらず、世の中の風潮はお金持ちを非難するばかり。現代の富裕層は遺産相続ではなく、自らの努力で富を形成した人が大半です。「富を築く100の教え」に基づいた行動を無意識のうちに取っている方が多いように思えます。「礼儀をつくせ」「大きな目標へゆつくり急げ」「王道を歩こう」。本書は渋沢栄一氏の言葉に著者が現代的な解釈をつける形式で読者に本質を問いかけます。

たかおか・そういちろう●
 アブラム・グループ・ホールディングス株式会社
 代表取締役社長兼CEO。東京大学卒業後、
 三井物産株式会社入社。情報産業・M&A事業等に従事。
 同社退社後、現在の会社を創業、現職に就任。
 同社では富裕層に対する情報提供および
 大手企業に対する事業開発・商品開発・マーケティングの
 コンサルティングを提供しているほか、富裕層のための
 プライベートクラブYUCASEE(ゆかし)を運営している。2月10日に
 発売された「富裕層はなぜYUCASEE(ゆかし)に入るのか」は、
 アマゾン・ベストセラー第1位を獲得する等、注目を集めている。

